

# 平成28年度 国際教育推進委員会活動報告

国際教育推進委員会

建元喜寿・石井克佳・田村憲司・岡聖美

松井一夫・吉田賢一・今野良祐・吉岡昌悟

本弓康之・福田美紀・仲本佳子

9年前に国際教育推進委員会を発足してから、「グローバル人材の育成」を目指し、筑波大学附属坂戸高等学校では総合学科の特長を生かしながらさまざまな国際教育・ESDの取り組みを行ってきた。一昨年度、スーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定された。また、本年度は国際バカロレア日本語DPの認定校となった。今後、本校の国際教育活動が何を目指していくか、形が見えてくるまでしばらく時間を要すると思われる。本稿では、第5回高校生国際ESDシンポジウム、第2回全国SGH校生徒成果発表会、国際的視野にたった卒業研究支援プログラムを中心にまとめ、今後の国際教育の在り方の方向性もまとめた。

キーワード スーパーグローバルハイスクール 国際教育 ESD（持続発展教育） カナダ校外学習  
教科「国際」 ユネスコスクール 課題研究 国際バカロレア

## 1. はじめに

筑波大学附属坂戸高等学校（以下「本校」）では平成20年に校内の国際教育推進委員会（Committee of International Studies、以下「CIS」）を設置し、それ以来本校独自の取り組みである「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」をはじめ、インドネシア・フィリピン・タイ・台湾などにある学校との交流、ユネスコスクールへの加盟、学校設定教科「国際」とその科目の設置、そして本校が主催する「高校生国際ESDシンポジウム」などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら実践を積み重ねてきた。そして、これまでの本校の実践の成果をベースとして、平成26年から5年間、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール校の指定を受けることになった。語学だけではなく、「グローバル社会において、自分は社会と将来どのようにかわり、平和で持続可能な社会を実現するために、自分は何ができるか。」を生徒自身が考え、実践できることを重視している。

1946年に地元の農業高校として発足してから70年、1994年からは日本初発の総合学科高校のパイオニアとして、とくに平成26年度のSGH指定後は、グローバル社会におけるキャリア教育を充実させながら、さらなる実践を積み重ねている。また、本年度2月に、国際バカロレア日本語DP校の認定をうけた。本校はSGHとIBの双方に関わる大きな転換点にたっている。

「総合学科」+「SGH」+「IB」、その先の本校の進

む道は「オープンプラットホームスクール」と考えている。日本や世界各地からさまざまな学校、人が集い、地域の人々とも交流し、相互の違いを認め合いながら、学校に関わったそれぞれが学びあい成長していく。そんな学校になれたらと日々努力を重ねている。本稿では、本校の国際教育活動の柱である、高校生国際ESDシンポジウムおよび海外卒業研究支援制度を中心に平成28年度の活動を報告する。



第5回高校生国際ESDシンポジウム・  
第2回全国SGH校生徒成果発表会  
—海外4校、SGH校40校が参加—  
(2016年11月10日、於：筑波大学東京キャンパス)

## 2. 平成 28 年度の本校における具体的な活動内容

### 2.1. 国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム

平成 20 年度より実施しているこのプログラムは、3 年次の学校指定必修科目「卒業研究」で国際的なテーマの研究を行う（または行おうとしている）生徒に対し渡航費の援助を行うものである。20 年度から 27 年度までの 8 年間で計 51 名の生徒がこのプログラムに応募し、うち 17 名の生徒を引率教員とともに海外の各国へ送り出してきた。

28 年度においては 2 年次生を対象に募集した結果、4 名の生徒が応募した。なお、それぞれの生徒の研究テーマと応募理由は下記の通りであった。

表 1 平成 28 年度「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」応募生徒の研究テーマ一覧

生徒	希望渡航国	研究テーマ
A	カボジア	地域素材を活用した義足の開発
B	インドネシア	R S P O 認証をうけたパーム油生産の可能性
C	タイ	タイの食品に関する研究
D	フィリピン	K-12 の教育制度に関する研究

CIS において「海外への渡航により卒業研究の深化が十分期待できるか」「費用に問題はないか」「実現可能性は十分か」などの観点から書類及び各生徒によるプレゼンテーションにより選考を行った結果、生徒 B の 1 名を支援対象とすることに決定した。このプログラムは、国や地域は指定せずに実施しているが、2 年次「T-GAP」でアセアンに関する活動を行っている影響からかアセアンに関する課題が多く見られる。また、テーマがより具体的で多岐にわたっており、総合学科における学びの成果が見受けられる。一方で、SGH 指定後、本年度が過去最低の応募者数となった。原因として、校内の行事が増えて生徒も多忙になっている、代表者の発表内容が毎年向上してきており「自分にはとてもできない」と萎縮してきているといったことも考えられる。

### 2.2. 第 5 回高校生国際 ESD シンポジウム@東京 2016 ・第 2 回全国 SGH 校生徒成果発表会

ESD とは Education for Sustainable Development（持続発展可能な社会づくりのための教育）のことである。これまで本校と交流実績を持つ海外校との交流を深めて生徒の国際的な視野を広げるとともに、持続発展可能な社会を目指して地球的課題に主体的に取り組む姿勢を涵養す

ることを目的として、2012 年から実施している。一昨年度から組織した S-CIS（生徒国際教育委員会：Student Committee of International Studies）のメンバー（本校の 1 ～ 3 年次生で国際教育活動に興味のある生徒が主体的に参加している）が中心となって、受付や会場設営、照明や視聴覚機材の操作、全体司会やシンポジウムのファシリテーターを行った。

本年度は、平成 28 年 11 月 10 日、筑波大学東京キャンパスを会場に実施した。シンポジウムの、メインテーマを、「SDGs and High School Students - 17 goals to change our world - ～SDGs と高校生：17 の開発目標から創造する私たちの未来～」として、各発表が統一感をもった形にした。

午前中は、国際連携協定を結んでいるインドネシア環境林業省附属高等学校、ボゴール農科大学附属コルニタ高校、フィリピン大学附属高等学校、そしてタイ・カセサート大学附属高等学校から各校の ESD に関する活動報告を行った。本年度は新たに SGH 指定校である東京学芸大学附属国際中等高等学校の皆さんにも口頭発表をお願いした。SDGs をメインテーマにしたことで、各校の活動が有機的にリンクし、中身の濃い発表となった。

午後は、第 2 回全国 SGH 校生徒成果発表会を開催した。北海道から沖縄まで全国から参加があり、海外校も入れると 40 校もの参加があった。各校の課題研究活動の成果を持ち寄りポスターで発表を行った。各校の課題研究活動が、SDGs の 17 の目標のどれにあたるかを各校のポスターに提示してもらい、テーマの明確化を図った。会場となった教室は満席となり補助席を出すほどの盛況で、熱心な議論が交わされた。進行はすべて英語で行われた。今回、JICA 国際協力機構のブースを作り、フィリピンゾーンやタイゾーンなど、本校の連携校と他の SGH 校の皆さんが交流を深められるような工夫も行った。本校の国際教育活動では「オープンプラットフォームスクール」を掲げている。本校がハブとなり国内外の多くの人が出会い学びあえる場を提供していきたい。来年度も 11 月 9 日に開催予定である。



生徒が中心となった運営



各校代表生徒によるSDGs宣言



ポスターセッションの様子

フィリピン大学附属ルーラル高等学校とは、国際的視野にたった卒業研究活動、SGH 国際FWなどでも関係が深まり、28年度当初から、本年度中に国際連携協定を結ぶことで基本合意にいたった。そして、平成28年11月9日、高校生国際ESDシンポジウムにあわせて、国際連携協定を締結することができた。平成29年度には、この連携協定にもとづき、はじめて本校から1名、1年間の予定で留学する予定である。



国際連携協定締結の様子

(左から田村校長、宮本教育長、カラスカル校長)

### 2.3. フィリピン大学附属ルーラル高等学校との国際連携協定締結

平成22年度の筑波国際農学ESDシンポジウムにおいて、「附属学校フォーラム」が開催され、本校、インドネシア・ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校、カセサート大学附属高等学校、フィリピン大学附属ルーラル高等学校の4校の代表教員が各学校の活動について発表を行った。このとき4名の教員のなかで、今後、各学校の連携を深め、生徒同士の交流を深めていくことで一致した。これが、現在の高校生国際ESDシンポジウムの枠組みの基本となっている。



カスガフィリピン附属高校校長の講評

#### 最後に

本校は、現在平成30年度入学生から国際バカロレア入試を開始し、生徒募集を開始する予定である。SGH事業とあわせて本校の新しい形を作っていくことになる。しかし、様々な業務が交錯し合いながら進んでいった27年度、28年度の2年間で、かなりの教員の異動もあり、総合学科とIBの両立をどうするかが、最大の課題となっている。どの仕事をどの分掌や委員会が担当するのか、分担が難しい場面もあった。28年度は、いち、校内委員会である国際教育推進委員会が、どの業務をどこまで担うか、構成メンバーや人数は今ままで良いのか、全校をあげた検討の必要性に駆られた。見かけ上、動いている本校の活動であるが、ESDを掲げながら、活動が持続的ではないジレンマに陥り大きな危機を感じている。30年度から始まるIBの業務と合わせ、29年度は、本校の今後の在り方を決める大きな年となるであろう。

※なお、SGHの平成28年度の内容は、第3年次報告として別途まとめている。SGHの詳細については、そちらを参照ねがう。

【資料】平成 28 年度 国際教育・ESD 活動一覧（抜粋）

4月	時間割外科目「インドネシア語Ⅱ」（1 単位）開講
7月	3 年生 2 名が姉妹校コルニタ高校に 1 年留学へ
8月	国際フィールドワーク（インドネシア）実施 生徒 7 名教員 3 名参加
8月	国際フィールドワーク入門（黒姫高原）実施 生徒 25 名教員 6 名参加
8月	教員 2 名が海外校外学習視察・現地打ち合わせでバンクーバーに渡航
8月	第 53 回全国国際教育研究大会高知大会 教員 1 名発表
9月	インドネシア・フィンランド・メキシコから 3 名の留学生在が来校（1 年間）
10月	姉妹校コルニタ高校から 4 名の留学生在が来校（3 週間）
11月	高校生国際 ESD シンポジウム@東京 2016（第 5 回）開催（坂戸+茗荷谷）
11月	第 2 回 SGH 生徒成果発表会開催 海外校・SGH 校 20 校によるポスターセッション
11月	フィリピン大学附属高等学校と協定校提携調印
11月	国際協力機構（JICA）青年海外協力隊 OV8 名の出前講座
12月	全国 SGH フォーラムで本校教員が事例報告
2月	「国際的な視野に立った卒業研究支援 P」 生徒 3 名・教員 1 名がインドネシア渡航
2月	第 3 回 SGH 研究大会・第 20 回総合学科研究大会開催
2月	株式会社 IC-NET 主催 40 億人のためのビジネスコンテスト参加
2月	埼玉県観光課以来のインバウンド中国教育視察団受け入れ
2月	栃木県立佐野高等学校 SGH 研究大会に生徒 2 名参加
2月	東京学芸大学主催都内国立大学附属高等学校 SSH/SGH 研究大会に生徒 5 名参加
3月	インドネシア中部ジャワ州ジョクジャカルタ第 6 高等学校受け入れ
3月	第 6 回サイエンスインカレ@筑波大学で SGH 活動の報告
3月	1 年次海外校外学習（カナダ・バンクーバー）実施
3月	SGH 国際フィールドワーク「インドネシア・ボゴールリーダー会議」 教員 2 名、生徒 2 名渡航、インドネシア政府およびユネスコ国内委員会で協議